

ベクトルおよび部分空間の直行性

ベクトルの長さ

n 次元ベクトル $x = [x_1 \ \cdots \ x_n]$ の長さ $\|x\|$ は

$$\|x\|^2 = x_1^2 + x_2^2 + \cdots + x_n^2$$

の正の平方根

ベクトルの内積

$$x^T y = [x_1 \ \cdots \ x_n] \begin{bmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_n \end{bmatrix} = x_1 y_1 + \cdots + x_n y_n$$

ベクトルが直交するとき内積は**0**

2.5.1

```
clear
x = [1,4,0,2]'
```

```
x =
     1
     4
     0
     2
```

```
y = [2,-2,1,3]'
```

```
y =
     2
    -2
     1
     3
```

```
x_lng = 1^2 + 4^2 + 2^2
```

```
x_lng =
     21
```

```
y_lng = 2^2 + 2^2 + 1^2 + 3^2
```

```
y_lng =
     18
```

```
dot(x,y) % x'*y
```

```
ans =
```

2.5.2

$\begin{bmatrix} 1 & 0 \end{bmatrix}$ と $\begin{bmatrix} 1 & 1 \end{bmatrix}$ は独立だが、直交していない

$\begin{bmatrix} 0 & 0 \end{bmatrix}$ と $\begin{bmatrix} 1 & 1 \end{bmatrix}$ は直交しているが独立でない

2.5.3

$$\frac{x_2}{x_1} \times \frac{y_2}{y_1} = -1$$

$$\frac{x_2 y_2}{x_1 y_1} = -1$$

$$x_2 y_2 = -x_1 y_1$$

$$x_1 y_1 + x_2 y_2 = 0$$

ここで、

$$x^T y = x_1 y_1 + x_2 y_2$$

なので、

直交性の条件と等しい

2.5.4

$$B * B^{-1} = I$$

なので $i \neq j$ ならば I_{ij} は 0 でなくてはならない

よって直交している

2.5.5

```
clear
v1 = [1,2,-2,1]'
```

```
v1 =
     1
     2
    -2
     1
```

```
v2 = [4,0,4,0]'
```

```
v2 =
     4
     0
```

$$\begin{pmatrix} 4 \\ 0 \end{pmatrix}$$

```
v3 = [1, -1, -1, -1]'
```

$$v3 = \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ -1 \\ -1 \end{pmatrix}$$

```
dot(v1,v2)
```

$$\text{ans} = -4$$

```
dot(v1,v3)
```

$$\text{ans} = 0$$

```
dot(v2,v3)
```

$$\text{ans} = 0$$

2.5.6

```
clear
x = [1,1,1]'
```

$$x = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$$

```
y = [1, -1, 0]'
```

$$y = \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 0 \end{pmatrix}$$

```
syms u v w
b = [u;v;w]
```

$$b = \begin{pmatrix} u \\ v \\ w \end{pmatrix}$$

```
eqn1 = dot(x,b) == 0
```

$$\text{eqn1} = u + v + w = 0$$

$$\text{eqn2} = \text{dot}(y, b) == 0$$

$$\text{eqn2} = u - v = 0$$

$$u = v$$

$$2v + w = 0$$

$$w = -2v$$

$$\begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ -2 \end{bmatrix} v$$

よって $\begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ -2 \end{bmatrix}^T$ の乗数倍が直交
また単位ベクトルは

$$\begin{bmatrix} \frac{1}{\sqrt{3}} & \frac{1}{\sqrt{3}} & \frac{1}{\sqrt{3}} \\ \frac{1}{\sqrt{2}} & -\frac{1}{\sqrt{2}} & 0 \\ \frac{1}{\sqrt{6}} & \frac{1}{\sqrt{6}} & -\frac{2}{\sqrt{6}} \end{bmatrix}$$

直交部分空間

部分空間 V と W が直交する条件は「 V のすべてのベクトル v_n が W のすべてのベクトル w_n と直交している」

例

$$v_1 = [1 \ 0 \ 0 \ 0], v_2 = [1 \ 1 \ 0 \ 0]$$

$$w_1 = [0 \ 0 \ 4 \ 5]$$

で張られる空間 V と W は、 w_1 が v_1, v_2 と直交するので直線 W は平面 V に直交している

2.5.7

```
clear
v1 = [1,0,0,0]
```

v1 =

1

0

0

0

```
v2 = [1,1,0,0]
```

```
v2 =  
      1      1      0      0
```

```
w1 = [0,0,4,5]
```

```
w1 =  
      0      0      4      5
```

```
syms a  
w2 = [0,0,0,a]
```

```
w2 = (0 0 0 a)
```

```
dot(v1,w2)
```

```
ans = 0
```

```
dot(v2,w2)
```

```
ans = 0
```

```
syms a b c d  
v3 = [0,0,5,-4]
```

```
v3 =  
      0      0      5      -4
```

```
dot(w1,v3)
```

```
ans =  
      0
```

2.5.8

V と W が直交するということは、それぞれに含まれるベクトル同士の内積がすべて $\mathbf{0}$ でなければならない

もし、 $\mathbf{0}$ ベクトル以外の共通ベクトルがあると、自身で内積をとることになるが、内積は $\mathbf{0}$ ベクトルでない限り $\mathbf{0}$ にならない

よって、 $V \cap W = \{\mathbf{0}\}$ となる

基本部分空間の直交について

任意の $m \times n$ 行列 A について、零空間と行空間は \mathbf{R}^n の直行する部分空間である

同様に、左零空間と列空間は \mathbf{R}^m の直交部分空間である

例

$$A = \begin{bmatrix} 0 & 1 & 4 & 0 \\ 0 & 2 & 8 & 0 \end{bmatrix} \rightarrow U = \begin{bmatrix} 0 & 1 & 4 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}$$

基底変数は第2列、他が自由変数

この時、順に各自由変数を¹とおき、 $Ux = 0$ を解くと A の零空間の基底を得られる

$$\begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 0 \\ -4 \\ 1 \\ 0 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}$$

上記定理より、これらはすべて A の行と直交している

また、 A の列空間は¹次元であり、基底変数の列 $\begin{bmatrix} 1 \\ 2 \end{bmatrix}$ だけで張られる

左零空間は、 $y^T A = 0$ より $\begin{bmatrix} -2 & 1 \end{bmatrix}$ となる

そして、これらは

$$\begin{bmatrix} -2 & 1 \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \end{bmatrix} = 0$$

となり、直交している

また、零空間は行空間に直交するすべてのベクトルを含む

そのような空間を「直交補空間」とよぶ

線形代数の基本定理（その2）

1. 零空間は行空間の直交補空間であり、行空間は零空間の直交補空間
2. 左零空間は列空間の直交補空間であり、列空間は左零空間の直交補空間

$Ax = b$ が解をもつのは b が左零空間に直交しているときに限る

b が列空間にあるのは、 $A^T y = 0$ のすべての解 y に b が直交しているときに限る

V と W が \mathbb{R}^n の部分空間の場合、以下の条件のうち¹つを満たせば直交補空間となる

1. $W = V^\perp$
2. $V = W^\perp$
3. V と W は直交しており、かつ $\dim V + \dim W = n$

